

付録 【校歌の変遷について】

● 第一作目 明治40年制定

明治40年に制定された最初の校歌である。当時本校は、現汐入小学校の裏側3mほど上にあり、前はまだ埋め立てがおこなわれてなく、海が見えたので「前に見渡す海広く」とうたわれていたのであろう。土地柄、歴史を踏まえつつ軍国色の強い歌であった。90周年記念CDの作成にあたり、川上哲夫氏が編曲した経緯がある。

● 第二作目 大正13年制定

二作目の校歌である。第1節は弟橘媛（おとたちばなひめ）の故事をよんだもので、通訳すると“相模の海の走水神社にまつられている弟橘媛の薫高い名を後の世に語り継ぐために、少女らが学園で勉学にいそしんでいる” という意味である。第二節は“天皇陛下のおいでになる、宮城の御門にあたる軍港を守る丈夫の建てた功績をここに見ることは、これこそ私たちの誇りである。” そして第三節は、“女の教え、人の道、祖国につくす真心を決して忘れるなどの御勅語を私たちは朝、夕、つつしんで守る” という意味である。最初の校歌同様、軍国主義の反映した歌詞であるが、全体の表現にやわらかさがあり、女子校の雰囲気は漂うものになっている。

● 第三作目 昭和21年制定

三作目の校歌である。最初の一節といい、どこことなく二作目と似ているが、三節を比較してみると“皇国につくす真心を忘るな” というところが、敗戦を迎え民主主義の世の中になったことで“あたらしき世に遅れじと” に変わっている。このあたり時代の流れがストレートに反映していて興味深い。

● 第四作目 昭和56年制定

四作目は、現在の校歌である。共学校としての、またはじめての混声四部合唱の校歌である。“橘姫の玉小櫛 流れて寄った走水 浜木綿の花香しく” このあたりは三作目の雰囲気を残しつつ、また、元女学校であったことを彷彿とさせる。しかし25年たった現在、校歌発表の時、團氏が言われたように生徒ひとりひとりの歌になり、育て上げられ、本校の校歌として定着している。創立90周年記念CDの作成にあたり、当時本校音楽科の高木 園子教諭が混声三部合唱に編曲した経緯がある。

県立横須賀大津高等学校創立百周年記念誌
「百年の記憶と歩み」より抜粋

- 今回の総会の資料は、たちばな会公式ホームページでもご覧いただけます。



県立横須賀大津高等学校同窓会 たちばな会ホームページ

<http://tachibana-kai.net>